英語形容詞の動詞化 ―― 認知意味論的分析 ――
(‘clear’ の場合)[i]

荻　野　隆　聡

1　はじめに

英語の形容詞の１つに clear がある。例えば ‘a clear glass’, ‘a clear sky’ のように使われる。また形容詞と同じ語形のままで動詞としても用いられる。この場合典型的には「何かを取り除く」の意で，次のように使われる。

(1) He cleared the table.
(2) He cleared the dishes.
(3) He cleared the table of dishes.
(4) He cleared dishes from the table.
(5) He cleared the hurdle.
(6) Clouds cleared from the sky.
(7) The sky cleared (up).

(1) – (7) のように動詞として用いられる clear は形容詞用法から派生したものと考えられる。ここでまず，形容詞用法に由来する動詞について考えておきたい。このような同一の語形で異なった品詞として機能する場合，一般に一方の品詞にゼロ接尾辞（接尾辞を付加してはいるが言語形式として現れない接尾辞）を付加して成立していると考えられ，ゼロ派生の品詞転換とよばれる。

ゼロ接尾辞付加によって成立する動詞には（i）名詞＞動詞，（ii）形容詞＞動詞の２種類が認められる。次は（i）名詞＞動詞の例として Clerk and Clerk (1979) が提示しているものである。

（i）Jane blanketed the bed.（ジェーンはベッドに毛布をかけた）
Kenneth kenneled the dog.（ケネスは犬を犬小屋に入れた）
Julia summered in Paris.（ジュリアはパリで夏を過ごした）
John butchered the cow.（ジョンは牛を殺した）
Edward powdered the aspirin.（エドワードはアスピリンを粉にした）
John bicycled into town.（ジョンは自転車で街に行った）

（i）のようなゼロ接尾辞を付した名詞由来動詞 (denominal verbs) については，現在までに比較的多くの研究がなされている[2]。

これに比べて clear のように，同じくゼロ接尾辞を付した形容詞由来動詞 (deadjectival verbs) についての研究は筆者が知るかぎりそれほど多くない[3]。１例として Adams (1973) があるが，これは形容詞由来動詞について以下のような記述はしているものの，その分類のみにとどまっている。

① Intransitive verbs meaning 'to be, become, the quality denoted by the adjective'
bald, dim, idle, mellow, pale, slim, sour, tense

② Transitive verbs meaning 'to cause someone or something to be, become, the quality denoted by the adjective'
bare, better (oneself), blind, blunt, busy (oneself), dirty, free, humble, ready, right, smooth, still, tame, warm

Many verbs may belong to both these groups, for example
clear, cool, empty, narrow, slow, sober (up), weary

③ Verbs expressing the manner in which an action is performed

[a] transitive

brave, brazen (something out), gentle, jolly (something along), rough (it), savage, shrill

[b] intransitive

level (with someone), shy

(Adams 1973 : 50)

上の記述は文法的観点から自動詞，他動詞，自他両用に大ざっぱに分類しただけのものである。特に②で多くの形容詞由来動詞は自他両用であるというが，なぜそうなるのかについては全く触れていない。この理由を影山 (1996 : 164) は次のようにいう。

> これに対して，多くの形容詞転換動詞は自他両用である。例を挙げよう。
> better, dim, dull, black, blunt, empty, foul, lower, mature, mellow, narrow, pale, slow, sober, still, tense, thin
> これらの基体形容詞の意味から考えると，その状態に変化することは，外的な作用によっても，あるいは，対象物自らの性質によっても可能であると判断される。

引用中の「形容詞転換動詞」は我々のいう形容詞由来動詞を指す。動詞 clear は典型的には「何かを取り除く」という他動詞的意味である。影山はこの記述の中で (6) (7) のように自動詞として用いられる用法は，基体形容詞の意味から考えられうる用法であるとしているが，Levin (1993 : 124) によると，(8) は (6) (7) と比べると文として自然さの度合いが落ちるという。

(8)? The sky cleared of clouds.

上の影山の主張では，なぜ(8)が不自然に感じられるのかに関しては説明できない。

また (1) (2) の解釈は異なると思われるが，それはなぜか。更に (3) (4) は目的語自体は (1) (2) と平行しているのに，(3) (4) 共に「彼はテーブルの上から食器をどこか他の場所へ片付けた」という同じような場面を描写する[4]。

上で引用した影山の説明ではこれらの点をうまく説明できない。

2　英語動詞 clear[5] をめぐる研究

近年，clear は 1 節でみたように様々な文法的振る舞いをみせるとして Beth Levin と Malka Rappaport Hovav によって多くの研究がなされている (Levin and Rappaport Hovav (1992), Levin (1993), Levin and Rappaport Hovav (1994), Levin and Rappaport Hovav (1995))。これらの研究の中でも特に Levin and Rappaport Hovav (1995 : 104) の次の説明は興味深い。

> For instance, in section 3.1 we noted the following constraints involving the verb *clear*:
>
> (9=55) a. The waiter cleared the table.
>
> b.*The table cleared.
>
> (10=56) a. The wind cleared the sky.
>
> b. The sky cleared.
>
> Our knowledge of the world tell us that tables are things that are cleared (typically, of dishes) through the intervention of an animate agent. The sky, however, can clear through the intervention of natural forces, such as the wind. Hence the difference in the possibility of intransitive counterparts.
>
> (例えば3.1節でみたように動詞 clear に関しては次のような制約がある。
>
> (9=55) a. The waiter cleared the table.
>
> b.*The table cleared.

(10=56) a. The wind cleared the sky.

b. The sky cleared.

我々の［現実世界についての］知識が，テーブルは，有生の動作主によってきれいにされる（典型的には上にのっている皿を取り除く）対象物であると認識させてくれる。しかしながら空は風などの自然の力によってそれ自身が［雲のない］澄んだ状態になることができる。すなわちこのことが自動詞として用いられる可能性があるか否かという差異なのである。）日本語訳は筆者。［ ］は筆者補。

この引用は Levin and Rappaport Hovav が (9b=55b) はなぜいえないのかという問題を人間の外界認知という観点から捉えようとしていることが明瞭にわかる部分である。けれども前節の最後で提起した問題は依然として未解決である。以下では clear を人間の認知という観点から分析しその用法の特徴を解明していくこととする。

3　Frame Semantics

分析を進めるに当たり，Charles J. Fillmore によって提唱される frame semantics（枠組意味論）の考え方に基づき考察する。frame semantics の基本概念は次のようなものである。

We speak of the structure lying behind a linguistic category as making up a “frame”, and of its elements as “frame elements”.
（我々は，言語範疇の背景にある構造を＜枠組＞と呼び，その構成要素を＜枠組構成素＞と呼ぶ。）（Fillmore 1992, 日本語訳は筆者。）

かなり抽象的な説明であるが，Fillmore (1982) が挙げている英語動詞 buy, sell, pay の考察をみると分かりやすい[6]。Fillmore はこれらの動詞の意味を正確に捉えるにはこの語の背後に「商取引フレーム」を仮定し，フレームエ

レメントとして the Buyer（買い手），the Seller（売り手），the Goods（商品），the Money（金銭）の４つを仮定する。

Fillmore は buy, sell, pay の意味はこれら４つのフレームエレメントを使って次のように説明できるという。

BUY focuses on the actions of the Buyer with respect to the Goods, backgrounding the Seller and the Money.

SELL focuses on the actions of the Seller with respect to the Goods, backgrounding the Buyer and the Money.

PAY focuses on the actions of the Buyer with respect to both the Money and the Seller, backgrounding the Goods.

（BUY は買い手の，売り手と金銭が介在した，商品をめぐる行為に焦点を当てている。SELL は売り手の，買い手と金銭が介在した，商品をめぐる行為に焦点を当てている。PAY は買い手の，商品が介在した，金銭と売り手をめぐる行為に焦点を当てている。）

（Fillmore 1982, 日本語訳は筆者。）

frame semantics は，ある語の意味をどのような観点から記述すれば良いのかという点に着目したものである。本稿ではこれを応用して clear の分析を行う。つまり clear を「何かを取り除く」という場面の中で捉えるのである。この場面を仮に「除去フレーム」とする。除去フレームのフレームエレメントとしては，まず除去行為を行う動作主が存在する。次に取り除く（除去する）対象が考えられる。これは取り除くものであるから動作主にとっては不必要な障害物である。また除去行為はある１点から別の１点に障害物を移動する行為であるから，障害物が存在する場所及び移動先の場所が考えられる。これらのフレームエレメントを整理してみよう。

除去フレームのフレームエレメント

（A）動作主

（B）障害物
（C）障害物が存在する場所
（D）障害物の移動先

次節以降では(A)-(D)のフレームエレメントを用いて clear の分析を行う。

4　他動詞用法[7]

clear は2種類の目的語をとりうる。まず(11)-(14)のように locative object（場所格目的語）のみをとる場合である。言い換えれば除去フレームのフレームエレメントの(C)が目的語になっている場合である。

(11) She leafed through her appointment book while Hawk and I cleared the counter and rinsed the cups and put them in the dishwasher. (Robert B. Parker, *Crimson Joy*, 209)（ホークと私はテーブルの上を片付けカップをすすぎ，食器洗い機に入れた。その間に彼女は予定を書き入れた手帳に目を通していた。）

(12) Police <u>cleared</u> the area close to the explosion. (LDOCE[8])（警察は爆発現場に集まったやじ馬を整理した。）

(13) Snowploughs have been out <u>clearing</u> roads. (*ibid.*)（除雪車が降り積もった雪を取り除いていた。）

(14) She frowned. "Don't you like my robe," she said. Her lower lip pushed out slightly. She turned as she talked and faced me, her legs apart, her hands on her hips, the bright sun silhouetting her through the cloth.

"Yeah. The robe's nice," I said. I felt a little feverish. I <u>cleared</u> my throat.

"Why don't you come over and take a closer look?" she said. (Robert B. Paker, *Early Autumn*, 66)（彼女は眉をひそめた。「この

服が気にいらないの」彼女は言った。下唇を少しつきだし，私に話しかけたとき向きをかえ，私を見た。足を開き，腰に手をおいていた。明るい太陽の光が布地を通して彼女の体のラインを映し出していた。「ああ，いい服だ」私は言った。少し興奮していた。私は咳払いをした。「こっちに来てもっとよくみて」彼女は言った。)

上例では実際の障害物はそれぞれ (11) では食事後の食器，(12) 爆発現場に集まったやじ馬，(13) 道路に降り積もった雪，(14) 喉にひっかかった痰等である[9]。けれども (11) - (14) では locative object をとっている。また次のように locative object をとり，かつ前置詞句により障害物を明示することも可能である[10]。

(15) Henry <u>cleared</u> the table of dishes. (Levin (1993 : 52)) (ヘンリーはテーブルの上の皿を片付けた。)

(16) I lay on my bed and shut my eyes for ten minutes. I needed to <u>clear</u> my head of everything that had happened on this day. (James Patterson, *Cats & Mouse*, 49) (私はベッドに寝ころんで10分間ほど目を閉じた。この日に起こった全ての出来事で頭が混乱した状態だった。)[11]

2 種類の目的語のうちもう 1 種類は，目的語が障害物そのもの（フレームエレメントの (B)) の場合である。この場合「障害物を越える」の意味で用いられる。clear がこの意味で使われる例を Beth Levin と Malka Rappaport Hovav は扱っていない[12]。

(17) Williams circled the bases 248 at Fenway in his 19-year career and each time he did it at a trot, for every homer he hit in Boston <u>cleared</u> a fence. (*The New York Times*, December 23, 1991.) (ウイリアムス（米大リーグのプロ野球選手）はボストンレッドソックスで

の19年に及ぶ選手生活において248回フェンウェイ球場（レッドソックスのホームグラウンド）の塁を回った。ホームランを打って塁を回るとき彼はいつも速足だった。なぜなら彼がここボストンで打ったホームランは全て（ランニングホームランではなく）フェンスを越えたものだったためである。）

(18) The horse easily cleared the fence. (LDOCE)

スポーツの走り高跳びの場合に "He cleared the bar."という（日本語でも「彼はバーをクリアした」という）がこれも (17) (18) と同じ種類の目的語である。

また目的語として障害物をとり，障害物の存在場所（フレームエレメントの (C)）を前置詞句によって明示する場合もある。

(19) Doug cleared dishes from the table. (Levin (1993 : 124))「ダグはテーブルの上から皿を片付けた。」

(20) Doug cleared the dishes from under the rack. (*ibid.* : 124))「ダグは棚の下の皿を片付けた。」

(21) Doug cleared the dishes from around the sink. (*ibid.* : 124)「ダグは流しの周りの皿を片付けた。」

(22) Doug cleared the dishes from behind the fridge. (*ibid.* : 124)「ダグは冷蔵庫の後ろの皿を片付けた。」

この場合の目的語は (17) (18) の目的語とは性質が異なる。(17) (18) の目的語は障害物ではあるが除去する必要はなく，動作主が障害物を越える（跳躍などにより）という性質のものだった。(19) – (22) で目的語として表されている障害物はどこか別の場所に除去される性質のものである。

Levin (1993 : 124) は (19) のみを locative variant（場所格異形）として (20) – (22) とは性質の異なった文として見ている。確かに from の後に under, around, behind などの場所を表す句を伴ってはいないけれども，障害物をあ

る場所から別の場所に移動するという点では同じである。(19) ではテーブルの上からの皿の移動，(20) ではテーブルの下からの皿の移動を表している。同様に(21)は流しのまわりから，(22) は冷蔵庫の後ろからの皿の移動を表している。(19) - (22) において from 以下の前置詞は通常明示されなければ「皿を除去する」の意味では解されない。例外として "Doug cleared the dishes." だけでも適切な文脈があればこの後に前置詞句（"from the table" 等）が省略されている，と考えられる可能性もある[13]。

我々は他動詞として使われる clear が障害物が存在する場所，障害物そのものという２種類の異なった目的語をとる場合をみてきた。そしてこの２種類の目的語をとる用法が，前置詞を後置するか否かで更に２種類に分かれる。これらを以下に整理してみよう。( ) 内は相当する例文である。< >内には表現されている除去フレームのフレームエレメントを記号と共に示す。

（E） locative object のみをとる場合。
(He cleared the table.)
<動作主 (A)，障害物が存在する場所 (C)>

（F） locative object をとり，かつ前置詞句により障害物を明示する場合。
(He cleared the table of dishes.)
<動作主 (A)，障害物が存在する場所 (C)，障害物 (B)>

（G） 障害物のみをとる場合。
(The horse easily cleared the fence.)
<動作主 (A)，障害物 (B)>

（H） 障害物を目的語としてとり，障害物が移動する前の存在場所を前置詞句によって明示する場合。
(He cleared dishes from the table.)
<動作主 (A)，障害物 (B)，障害物が存在する場所 (C)>

ここから２つの特徴がみえてくる。まず動作主，障害物が存在する場所は

(G) を除く全てにおいて表現されている。次に (E) では実際に障害物が存在しているにもかかわらず表現されない。この2つの特徴は決して偶然の産物ではなく人間のものの捉え方すなわち認知が密接に関係しているものと考えられる。clear は4つのフレームエレメントの中でも動作主と障害物が存在する場所に認知焦点（以下単に焦点という）を当てている動詞といえる。何らかの目的のためにある場所に存在する障害物を取り除くわけであるからその障害物が存在する場所は動作主にとって重要なものなのである。

(E) では動作主にとっては障害物は不必要なものであるため，焦点が当てられず背景化されて表現されないと考えられる。また障害物の移動先は存在することは間違いないが，動作主の目的はあくまでも「ある場所を障害物がない状態にする」ことであるから移動先は障害物同様，背景化されてしまっていて表現されていない。

(F) での前置詞句によって障害物を明示するか否かは任意のものである。このことは障害物が何かを文脈から理解できるのであれば，前置詞句を明示しなくても文が成立する（すなわち (E) と同じ）ことからもわかるだかるだろう。

(G) は目的語に障害物そのものをとっていて，前置詞の付加もない。これは焦点の当て方の違いによるものだということができる。(E) (F) の場合は実際に障害物を除去した。これは次に述べる (H) も同様である。除去の結果，動作主から距離を隔てた場所（障害物の移動先，フレームエレメントの (C)）に障害物が移動した。(G) の場合実際に移動するのは動作主だが，動作主移動後の状況は (E) (F) (H) と同じである。すなわち動作主と障害物の間に隔たりがあり，動作主にとって障害とはならない状態になるのである。また (E) (F) (H) とは異なり障害物そのものが表現されているが，これは障害物を越えること自体が目的であるために焦点が当てられているものと考えられる。そして除去することが目的でないため障害物の存在場所は明示されない。(G) は clear が動作主と障害物が存在する場所に焦点を当てる動詞であることを考えると派生的な用法であると思われる。

(H) は前置詞句によって障害物が存在する場所が明示されない場合は目的

語を障害物として解するのはほとんど不可能だと思われる。冒頭に挙げた(2)がそのよい例である。clear は動作主と障害物が存在する場所に焦点を当てている動詞であるため，焦点の当たっていない障害物そのものを目的語にとる場合は，前置詞句を後置して障害物の存在場所を明らかにしなければならないのである。もちろん前述のように明確な前後関係があればこの限りではない。

5　自動詞用法[14]

Levin (1993 : 55) では clear が天候に関して使われる例として (23) (24) をあげている。

(23) The sky cleared (up).「空がはれた。」
(24) Clouds cleared from the sky.「雲がはれた。」

(23) で clear 以外で表現されているのは the sky のみである。3 節で挙げた除去フレームに即して考えると (23) のフレームエレメントは以下のようになるだろう。

（I）　動作主：風などの大気の動き
（J）　障害物：雲
（K）　障害物が存在する場所：ある人間の視界に入る空
（L）　障害物の移動先：(K) における人間の視界に入らない空

この 4 つのフレームエレメントの中でいえば (23) では (K) のみが表現されていることになる。これは (23) が発話される場面を考えてみれば当然の結果といえる。(23) が発話される場面は典型的にはそれまで曇っていた空を見上げたときである。このとき空を見上げた人間の焦点は「青空」に当てられている。なぜ雲が視界から消えたか，何が視界から消えたか，それまで視界に入

っていた雲がどこへいったかには焦点が当てられていない。もっとも重要なのは「青空になったこと」なのである。つまり (K) 以外は全て背景化されているのである。ここでは動作主も背景化されてしまっているが，これは動作主が人間でないためであろう。1節で (25=8) は (23) より自然さの度合いが少し落ちると指摘した。

(25)? The sky cleared of clouds.

この例は上の我々の説明を支持してくれている。なぜなら of clouds の付加は，焦点が当たっていない（表現しなくとも意味解釈に支障をきたさない）フレームエレメントをわざわざ明示しているということを意味する。焦点が当たっていないフレームエレメントは背景化され表現上現れないという考え方に基づくと，(25) では不要なエレメントが表現されていることになり，このため自然さが落ちるものと考えられる。

(24) も (23) とほぼ同じ場面を描写するが，場面の捉え方が微妙に異なる。同じ場面を描写するのであるからフレームエレメントは先に示した (I) - (L) と変わらないが，どのエレメントに焦点をおいているかが違う。(24) では (J) (K) 両方に焦点が合わされている。(J) のみ表現した (26) はいえないだろう。

(26)?? Clouds cleared. [15]

「雲」は視界から消える障害物であり，上述のように clear は障害物が存在する場所（この場合「空」）に焦点を当てている動詞であるため，これを表現していない (26) は不自然な文になってしまう。ここにおいて他動詞用法の (27) と平行した関係をみることができる。

(27=2) Doug cleared the dishes.

(27) は適切な文脈がなければ「皿を除去する」の意味では解されないと前に述べた。(26) は障害物が主語として現れており，(27) は目的語として現れているという差はあるが焦点が当たっている「障害物が存在する場所」を明示しない文は自然に感じられないのである。

6　おわりに

以上 clear が文法的に様々な種類の主語，目的語をとり，その原因は人間の場面認知のしかたによるものだということを述べてきた。もちろん全ての用法を網羅できたわけではないが，少なくとも Levin and Rappaport Hovav (1991：130) が提示する次のような問題を説明することができよう。

> However, while the action denoted by the verb necessarily implies the resultant state, the state denoted by the related adjective does not have to be the result of a specified or unspecified action or event. A clear blackboard doesn't have to be one which has been cleared.
> (しかし，[形容詞由来の] 動詞によって表される行為は必然的に結果状態を意味する。他方で元となる形容詞によって表される状態は，具体的に表現されているか否かを問わず行為または出来事の結果を表す必要はない。[したがって] 形容詞 'clear' で修飾される黒板は，動詞 'clear' で表される行為を行った結果状態を表すとは限らない。) (日本語訳，下線は筆者。[ ] は筆者補。)

我々の立場からすれば下線部で述べられていることは当然である。前節までに述べた clear が用いられる際の認知的な制約，すなわち「動作主の移動又は障害物を移動することにより動作主の前から障害物がなくなる」という制約のうち「動作主の移動又は障害物を移動する」の部分が欠けているため，黒板の文字を消すという意味では用いられない。黒板を消す場合は "clean the blackboard" というのが普通だろう[16]。

本稿では clear の分析によってその一端を示すのみにとどまったが，名詞由来動詞と同様に形容詞由来動詞に関しても少なからず問題が含まれていると思われる。前掲の Adams (1973) も従来の文法的枠組から大まかな分類をしたにすぎず，再分類の余地が多々ある。筆者自身も形容詞由来動詞の意味的，文法的特徴について引き続き考察していきたいと考える。

【注】

1　本稿をまとめるに当たり，ご指導頂いている国広哲弥教授より貴重なご意見を賜った。また先生は Adams (1973) を貸与下さった。記して謝意を表する次第である。なお当然のことながら本稿における不備は筆者の責任である。

2　長嶋 (1980)，影山 (1996：171ff)，Kageyama (1997a)，影山 (1997b) 等が挙げられる。

3　以下で単に「名詞由来動詞」「形容詞由来動詞」という場合にはゼロ派生の動詞を指す。

4　(3)(4) の違いは後節で論じる認知焦点の差異に起因するものと考えられる。

5　2 節以降，特に断りなく clear という場合には動詞 clear を指す。

6　以下，frame は「フレーム」，frame elements は「フレームエレメント」とカタカナで表記する。

7　ここでいう「他動詞用法」とは，目的語をとるという従来の文法的観点からみた考え方に基づく。

8　*Longman Dictionary of Contemporary English.* Second Edition, Longman, 1987.

9　Levin and Rappaport Hovav(1992)は本稿でいう「障害物」に対して 'locatum' という用語を使っている。locatum は Clerk and Clerk (1979) より借用したものであるがClerk and Clerk は元々，名詞由来動詞の移動物を示すのに locatum を使った。次の文において 'blanket' は「毛布をかける」という意味の他動詞として使われている。この場合の locatum は物体としての blanket（毛布）である。

　She blanketed the bed.

しかし厳密に考えれば locatum でも，動詞 blanket における付加する locatum と clear における除去する locatum の違いがある。本稿では人間の認知という観点からこの差異は重要だと考え locatum ではなく日本語の「障害物」を引き続き使うこととする。

10　Levin and Rappaport Hovav (1992) は (15)(16) のように locative object をとりながら障害物を of によって表すことができる用法を of variant（of 付きの異

形）と呼ぶ。彼らは locative object のみをとる形を基本形と考えているようである。

11　後半部を「私はこの日に起こった全ての出来事を頭から取り除く必要があった。」と訳す向きもあるだろう。しかしこれは日英語の認知焦点の違いに起因した直訳である。英語では「この日に起こった全ての出来事で頭が混乱した状態」だから「全ての出来事を頭から取り除く必要がある」と論理的筋道に沿って表現している。日本語に訳す際には，論理的表現ではなく当該場面を直接描写した方が分かりやすいと思われる。cf. 国広 (1974, 1995)

12　Levin and Rappaport Hovav (1992), Levin (1993), Levin and Rappaport Hovav (1994), Levin and Rappaport Hovav (1995)では扱っていない。

13　ジョン・ボチャラリ氏（東京大学教授，米国ニューヨーク出身）による内省報告では相当の文脈の助けが必要だということである。

14　注 7 同様にここでいう「自動詞用法」とは，目的語をとらないという従来の文法的観点からみた考え方に基づく。

15　前出のジョン・ボチャラリ氏によると相当の文脈の助けがなければ不自然ということである。

16　'clean' については本稿では扱うことができなかった。clean は clear と同様に除去動詞の 1 つとして分類される (Levin 1993 : 124) 形容詞由来動詞であるが文法的に clear とは異なる振る舞いをみせる。今後の研究課題である。

【参考文献】

Adams, Valerie (1973), *An Introduction to Modern English Word-Formation.* Longman. 邦訳，杉浦茂夫・岡村久子訳 (1976),『現代英語の単語形成論』，こびあん書房。

Clerk, Eve V. and H. H. Clerk (1979), 'When nouns surface as verbs', *Language* 55 : 767-811.

Fillmore, Charles J. (1982), 'Frame semantics', In The Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm—Selected Papers from SICOL-1981,* 111-137, Seoul, Seoul:Hanshin Publishing Company.

Fillmore, Charles J. (1992), ' "Corpus linguistics" or "Computer-aided armchair linguistics" ', In Jan Svartvik (ed.), *Directions in Corpus Linguistics* , 35-60, Mouton de Gruyter.

影山太郎 (1996),『動詞意味論』，くろしお出版。

Kageyama, Taro (1997a), 'Denominal verbs and relative salience in lexical conceptual structure', In Kageyama Taro (ed.), *Verb Semantics and Syntactic*

Structure, 45-96, Tokyo: Kuroshio publishers.

影山太郎 (1997b),「名詞から動詞をつくる」, 中右実（編),『日英語比較選書 8 語形成と概念構造』, 11-52, 研究社出版。

国広哲弥 (1974),「人間中心と状況中心」,『英語青年』2 月号, 688-689, 研究社出版。

国広哲弥 (1995),「誤訳の解剖(3)」,『言語と文化論集』第 2 号, 70-91, 神奈川大学大学院外国語学研究科。

Levin, Beth (1993), *English Verb Classes and Alternations*. The University of Chicago Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1992), 'Wiping the slate clean', In Beth Levin and Steven Pinker (ed.), *Lexical & Conceptual Semantics*, 123-51, Blackwell.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1994), 'A preliminary analysis of causative verbs in English', *Lingua* 92 : 35-77.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995), *Unaccusativity:At the Syntax—Lexical Semantics Interface*. The MIT Press.

長嶋善郎 (1980),「語構成の比較」,『日英語比較講座　第 2 巻　音声と形態』, 235-285, 大修館書店。

【辞典】

Longman Dictinary of Contemporary English. Second Edition, Longman, 1987.